

## 未来を見据えた持続可能な村づくり



美浦村長  
中島 栄氏

筑波銀行美浦支店長  
殿塚 貴之

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとのつながりを深めるべく取り組んでいます。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は茨城県美浦村です。筑波銀行美浦支店長 殿塚貴之が美浦村長 中島栄氏にお話を伺いました。

### 村の全児童生徒が集まる 小中一貫校の設置

美浦村の人口は2000年ごろから減り始め、当時1万8千人を超えていた村民は、現在1万5千人を割り込んでいます。特に子育て世帯の転出が問題となっていて、転出を抑制し、さらに転入を促進するためには、美浦村で子どもを育てたいと感じてもらえる良好な教育環境を提供することが、非常に重要だと考えています。

そこで現在、小学校の統合と小中一貫校の設置というビッグプロジェクトを進めています。

美浦村には3つの小学校がありますが、児童数はピーク時の半数ほどに減少しています。このままでは、数年後に複式学級（1つの学級で2つ以上の学年が学ぶ）となる学校が出てくるため、統合も視野に入れた検討が必要となりました。そこで2017年、教育委員会が保護者に対してアンケート調査を行ったところ、「複式学級が生じるなら学校統合もやむを得ない」「1学年2学級以

上が望ましい」という回答を多くいただきました。

2018年には教育関係者や保護者代表などで構成する「美浦村立小学校あり方検討委員会」を設置して検討を重ね、3つの小学校をすべて統合する方針がまとまりました。

その後、統合小学校を設立する場所について検討したところ、美浦中学校の敷地内に新校舎の建設が可能であり、体育館も共用可能であることがわかったため、ここに小学校・中学校併設型の小中一貫校を設置することが決まりました。美浦中学校は建替後10年あまりと新しいうえ、2021年度中には体育館にも空調設備を整備します。これらと新校舎を合わせて、美浦村の子どもたちは、とても快適な学校施設で学べるようになります。

また、美浦村の小学校では、木原小学校の「キッズ☆カンパニー（起業体験）」、安中小学校の「縄文太鼓クラブ」、大谷小学校の「吹奏楽部」など、特色のある活動が各校で行われていますが、統合することにより、村内のすべての児童が、これらの活動を選択し、参加できるようになります。





現在の美浦中学校

新校舎の建設については、庁内企画財政課、都市建設課、教育委員会および村内小中学校から選出した教職員による「美浦村統合小学校建設検討協議会」を設置し、統合小学校における教育方針を視野に入れつつ、実現可能な施設の内容と中学校敷地内における設置場所について協議しています。現在は設計の段階に入っており、2024（令和6）年度末の完成を予定しています。

なお、地域の方々からは、「地域のシンボルである小学校が無くなってしまうとその地域が衰退してしまう」といった統合に反対する意見もありましたが、最終的には「子どもたちのより良い教育環境のためであれば」とご理解をいただきました。廃校となる3校については、地域の方々にとって有益な活用方法を今後検討していきます。

## ICT教育による 村の未来を担う人材の育成

教育についてもう一つお話しします。私が村長に就任してから、他地域に先駆けてICT教育に取り組んできました。今でこそ、全国ほとんどの小中学校で、一人1台のタブレットやノートPCが整備されていますが、美浦村では2010年に小学校4年生以上の全クラスに電子黒板と一人1台のタブレットを整備し、各校にICT支援員を配置しました。そのため、美浦村の教員はすでにICT機器の利用に精通しており、電子黒板や電子教材を活用した質の高い授業が行えるなど、先行して取り組んできたことによるメリットが現れています。

また、近隣の情報処理系の学科のある高校からは、美浦中学校出身の生徒は優秀だと褒められています。2010年に小学4年生だった子どもたちが、現在高校を卒業して3年目になり、村役場にも就職していますが、高校在学中に情報系の様々な資格を取得しており、これからの時代に無くてはならない人材に育っています。

さらに、今後ICTを活用した場所を選ばない仕

事が増えていく中では、若者が村外に転出しなくても、あるいはUターンしても、活躍する手段や機会は増えていくと思います。そういった面からも、ICT教育には力を注ぎ続けたいと思います。

## 「住みたい、学びたい、働きたい、遊びたい」市街地の形成

茨城県は、国道125号のバイパス整備（4車線）を広域で進めています。すでに美浦村から土浦方面への整備が進んでおり、移動時間もかなり短縮されています。今後稲敷方面へのバイパスが開通すると、多方面からのアクセスが大幅に改善されて、人の流れも変わってくると思います。

そこで美浦村では、このバイパスが通過する役場周辺地区に対して「地区計画※」を設定し、役場や公民館、総合公園といった公共施設を核に、交流施設の設置や商業施設の誘致などにより、日常生活から子育て、教育・文化、スポーツ、地域交流の拠点づくりを進めています。

2017年3月には、国の地方創生関連の交付金を活用した施設「みほふれ愛プラザ」を開設しました。この施設は、子育て支援、多世代交流、地産品の直売を目的とした地域交流館です。また、この地区には、以前は美浦村唯一のスーパーマーケット、ヨークベニマルがありますが、ふれ愛プラザの開設を皮切りに、スーパーマーケットのカスマやドラッグストアのセキ、ホームセンターのコメリなどが相次いで出店しました。これらに加えて、生活利便性を高める商業店舗の誘致計画が現在進行中です（下写真、2期計画部分）。

なお、この地区には、先にお話しした美浦中学校と統合小学校の敷地が隣接しています。さらに保育所や幼稚園、児童館もまとめることで、「教育ゾーン」を形成したいと考えています。

この一帯は、これから数年の間に「住みたい、学びたい、働きたい、遊びたい」魅力的な市街地になるでしょう。



地域交流拠点（右側が2期計画部分）

※地区計画：住民の身近な生活空間である地区や街区を対象とする都市計画で、道路や公園などの公共施設の配置や、建築物の立て方などに関するルールを定めることにより、地区の良好な環境を整備・保全するための制度



## 村民による「SDGsの取組」を支援

### 脱炭素への取組を支援

2014年から、太陽光発電(メガソーラー)による売電事業を行っています。その事業収入から借入金の返済と将来の修繕・撤去費用の積立をしても、十分な余剰が出ています。

その資金を活用して、住宅用新エネルギー・省エネルギー機器の設置や低公害車の購入をする村民に対して補助金を支給しています。村の脱炭素事業の収益で村民の脱炭素の取組を支援する、これはまさにSDGsの取組だと自負しています。



美浦村のメガソーラー

### 歴史と自然環境保全への取組を支援

美浦村には、全国を代表する縄文遺跡である「おかだいら陸平貝塚」(国指定史跡)があり、村民が主体となって保全活動やイベントなどを行っています。その近隣に位置するゴルフ場からは、一人1回のプレーにつきプレイヤーから50円、ゴルフ場から50円の計100円の寄付をいただいております。それを村の基金に積み立て、この貝塚と周辺の自然環境の維持管理のための財源としています。

このような仕組みは全国的にも珍しいものですが、無理のない負担で貴重な歴史と自然を次世代につないでいくといった意味で、SDGs的だと思います。また、プレーの後に寄付金が活かされている貝塚に立ち寄る方もいて、美浦村を知っていただく良いきっかけにもなっています。



陸平貝塚の復元竪穴住居と美浦村マスコットキャラクター「みほーず」

## 丁寧な説明による納得性の高い村政運営

村民の方々にはそれぞれの立場があるので、どのような提案であっても反対意見があがるのは当然のことです。そこで私は、話し合いの機会を大切に、丁寧な説明を心がけています。

一つの課題に対し、執行部(村長を含めた行政職員)側で一つの提案に固めてしまう前に、様々な選択肢を示して、住民の皆さんと議論していきます。はじめはそれぞれの立場に基づいた様々な意見が出てきますが、それらを聞いているうちに、お互いの異なる立場を理解した上で、村全体としてより良い方向を考えた意見が出るようになり、話がまとまっていきます。

このようなやり方ができるのは、人口が少ないことの強みです。手続きは多くなりますが、結論が出るまでの時間はかえって早く、納得性も透明性も高くなります。

私と議会や役場職員との関係についても同様です。議員数も職員数も多くないため、顔の見える関係で、意思疎通や情報交換ができます。そのおかげで、必要な施策をいち早く実行できていると思います。



穏やかに熱く語る中島村長

## 筑波銀行に期待すること

やはり、地域の事業者が元気でなければ村も活気が出ません。事業者は環境の変化を先読みして動くことが重要であるため、筑波銀行にはそういった判断材料になる情報を提供して欲しいと思います。そうすると、事業者の側からも情報が出てきてWin-Winの関係が作れると思います。

(取材日: 2021年12月21日)



## わがまちのSDGs – 美浦村 –



環境問題に取り組み大きな功績を残した元村長の市川紀行さんからお話を伺いました。

テキサスインスツルメンツ株式会社（本社、米ダラス、以下「TI」とする）は、世界を代表する半導体メーカーであり、同社の日本法人が運営する美浦工場は、現在約1,100人の従業員を擁する美浦村を代表する企業です。工場は1980年に操業を開始しましたが、その立地にまつわるお話をしたいと思います。

TIは、1968年に日本法人を設立し、国内での製造拠点を探していました。本社から来た方が霞ヶ浦を一望できる景観を気に入り、美浦村での立地を決意しました。半導体の製造には大量の水が必要なため、大量の工業排水が発生しますが、当時の国や県の条例においては、基準の濃度まで「薄めれば流すことが可能」でした。

当時、村議会議員であった私は、県やTIの動向を見ながら、この排水方法に大きな疑問を抱きました。「半導体は日々進化しており、製造時に排水される物質が、今は害の無いものであっても、いずれは有害な化学物質や金属類、放射性物質などを含むようになるかもしれない。そうすると、薄めて流しても湖底に蓄積し、深刻な環境破壊や人々に健康被害を及ぼす公害につながるのではないか。」と考えました。

ちょうどその頃、私は高校時代の友人たちと、水質汚濁が進行していた霞ヶ浦の浄化運動に取り組んでいました。そこで様々な研究論文の収集や国立公害研究所（現国立環境研究所）への相談などを行っていたところ、友人の佐賀純一君（医師・作家）が、「無排水クローズドシステム」と

いう、排水を流さずに浄化して再利用する技術の実践研究資料を発見しました。

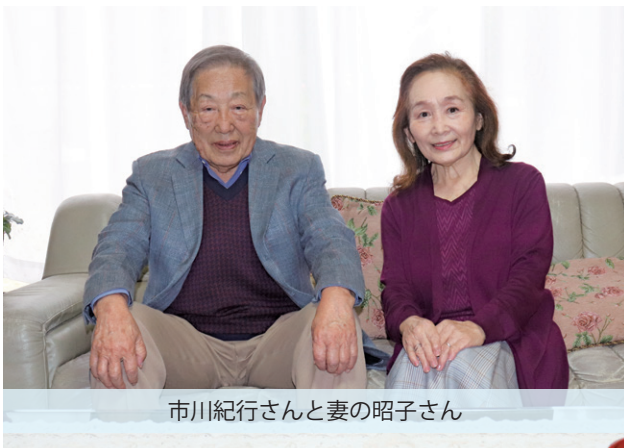
そして私たちは、TIの日本法人にこのシステムの導入を申し入れました。TI本社では既に同様の研究をしており、美浦工場で実用化することを決定しました。

こうした取組の結果、茨城県は条例の中で、霞ヶ浦周辺に建設される工場についても「無排水クローズドシステム」の導入を義務付けました。これは、その後の霞ヶ浦の水質汚濁進行を抑えてきた大きな要因になっていると思います。

当時のTIにとっては多額の投資となりましたが、それは一流企業としての英断だったと思います。このあたりでは際立って目を引く10階建てのTI美浦工場は、霞ヶ浦浄化の「シンボル」です。もし公害が発生していたら、地域の「悪魔」になっていたことでしょう。

話は変わりますが、1983年に村長になった私は、農業集落の下水道整備に取り組みました。生活排水が農業用水の水質を悪化させ、さらに霞ヶ浦の水質汚濁にもつながるためです。1987年、県内初となる農村集落排水事業の供用を開始しました。私はその後、農業集落排水事業全国推進協議会の会長も務めました。

霞ヶ浦は、地域住民の日常生活や、農業・水産業、工業、観光業などの産業を支えています。またなんとといっても、多様な動植物が存在する地球にとって貴重な財産です。そんな霞ヶ浦をもっと良い状態にして次の世代につなぐことが、私たち湖畔の村の住人の使命だと思っています。



市川紀行さんと妻の昭子さん

### 市川紀行さんのプロフィール

- 1940年 中国撫順市に生まれる
- 1959年 土浦第一高等学校卒業
- 1966年 北海道大学農学部卒業
- 1970年 市川建設工業株式会社設立
- 1975年 美浦村議会議員就任（2期）
- 1983年 美浦村長就任（4期）
- 1999年 美浦村長退任

村長時代より、JRA美浦トレーニング・センター関連で移住してきた5,000人と、元からの村民が融和するためには村民主体の文化活動が重要と考え、200人の村民合唱団とオーケストラによる「村民の第九」の企画・実行、縄文遺跡陸平貝塚の保存・活用、地域劇団「宙の会」の運営（脚本・演出）、地方自治文化研究会「一望塾」の開催などに積極的に取り組み、2020年には文部科学大臣社会教育功労者表彰を受けた。